

# 部活動におけるいじめはなぜ起きるのか？

— 大学生を対象とした回顧調査をもとに —

久保田 真 功

## 1. 問題の設定

本研究の目的は、大学生を対象とした回顧調査をもとに、部活動におけるいじめに影響を及ぼす要因について検討することにある。

日本における部活動に相当する活動は、海外にも存在している。しかし、日本における部活動と海外における部活動とは、かなり様相が異なるようである。中澤(2014)は、一連の比較体育・スポーツ研究をもとに、世界34カ国の中等教育段階のスポーツの場を、「学校中心型」「学校・地域両方型」「地域中心型」の3つに分類している。それによると、運動部活動と地域クラブの双方が存在する「学校・地域両方型」が、ヨーロッパの大部分や北米を中心に最も多くなっている(20カ国)。その一方で、運動部活動を主とする「学校中心型」の国は、日本を含むアジア5カ国と最も少なくなっている。さらに、日本以外の4カ国において「学校中心型」となっているのは、地域クラブが未発達なためである。以上を踏まえると、日本における部活動は国際的にみても特殊な状況に置かれていると言えるだろう。

それでは、日本の部活動は学校教育においてどのような位置づけにあるのだろうか。中学校学習指導要領(平成29年3月告示)の総則では、部活動について次のように述べられている。「教育課程外の学校教育活動と教育課程の関連が図られるように留意するものとする。特に、生徒の自主的、自発的な参加により行われる部活動については、スポーツや文化、科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等、学校教育が目指す資質・能力の育成に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図られるよう留意すること(以下省略)」。このことから、部活動は正規のカリキュラムに組み込まれた活動ではないものの、その教育的意義が強調されていることがうかがえる。そのため、部活動に関する日本の先行研究を見ると、部活動の教育的効果に着目した研究が少なくない<sup>(1)</sup>。比較的多く見られるのは、次の2つの研究である。

第1に、部活動と学校適応との関連に着目した研究である。例えば、白松(1993)は、高校生を対象とした質問紙調査をもとに、部活動への参加と学校適応との関係について検討している。その結果、①部活動参加者は非

参加者と比べ、学校に適応する傾向にあること、②部活動への参加が学校への適応を促し、結果として学業成績を高める傾向にあること、などを明らかにしている。

また、竹村・前原・小林(2007)は、高校生を対象とした質問紙調査をもとに、スポーツ系部活への参加の有無と学業の目標指向性および適応との関係について検討している。その結果、スポーツ系部活参加群は非部活動群と比べ、①課題指向性(新しい知識や技術を努力して獲得したいという傾向)や協同性(友人と協力しながら課題達成をしたいという傾向)が高い傾向にあること、②自己不明瞭感(現在および将来の自分自身が把握できないこと)が低い傾向にあること、③授業を楽しんでいる傾向にあること、などを明らかにしている。

さらに、岡田(2009)は、中学生を対象とした質問紙調査をもとに、部活動への参加が学校への心理社会的適応に及ぼす影響について検討している。その結果、①部活動に積極的に参加している生徒は学校生活の様々な領域で良好な状態にあるとともに、心理的適応も高い傾向にあること、②その一方で、部活動に積極的でない生徒には、部活動に積極的に参加している生徒に見られるような傾向はうかがえないこと、などを明らかにしている。この結果は、単に部活動に参加さえすればよいのではなく、部活動に積極的に参加することが生徒の学校への心理社会的適応を高める可能性を示唆している。

加えて、林川(2015)は、中学生を対象とした質問紙調査をもとに、学級と部活動という2つの所属集団に着目して、中学生の学校適応のメカニズムについて検討している。その結果、①高い積極性をもって取り組んでいる部員が高い比率を占める部に所属する生徒は、生徒自身の積極性を統制しても高い学校適応を示していること、②運動部所属の学校適応への正の効果は、生徒が部内で良好な先輩—後輩関係を築けている場合に限定されること、③学級集団の特性による緊張を、異年齢集団である部活動における人間関係が緩和している可能性があること、などが明らかとなっている。この結果は、①個人レベルでの部活動への積極性だけではなく集団レベルでの部活動への積極性(部活動全体の積極性)や、部内の良好な先輩—後輩関係が、生徒が学校に適応する上で重要であること、②学級の疎外性もたらす不適応を部活動における異年齢関係が緩和させる可能性があるこ

と、を示している。

第2に、部活動によって培われる資質・能力に着目した研究である。例えば、上野・中込（1998）は、高校生を対象とした質問紙調査をもとに、運動部活動への参加がライフスキル獲得に及ぼす影響について検討している。その結果、運動部活動参加者は部活動に全く参加していない生徒と比べて、対人スキルおよび個人スキルを獲得している程度が高いこと、などを明らかにしている。

また、長谷川（2005）は、大学生を対象とした高校部活動に関する回顧調査をもとに、部活動がパーソナリティ形成に及ぼす影響について検討している。その結果、①部員数が多い場合に、統率力と責任感が高まる傾向にあること、②部員同士の関係が良好である場合に、協調性が高まる傾向にあること、③参加大会レベルの高い部に所属している場合に、明朗性と自立心が高まる傾向にあること、などを明らかにしている。

さらに、上野（2006）は、高等専門学校の生徒を対象に、運動部活動への参加を通じて目標設定スキルの獲得を目指すプログラム（以下、SPG）を実施し、その効果を検討している。分析の結果、SPGへの参加により、運動部活動場面や学校生活場面における目標設定スキルが獲得されることを明らかにしている。

一方、部活動については、その否定的側面についても言及されている。ここでは、近年問題視されている体罰と教員の多忙化という2つを取り上げたい。まずは、部活動における体罰についてである。文部科学省（2013）が各都道府県・指定都市教育委員会等に依頼して実施した調査（「体罰の実態把握について（第2次報告）」）によれば、体罰の場面として最も多いのは、「部活動」（中学校で38.3%、高等学校で41.7%）となっている。

また、長谷川（2014）は、大学生を対象とした中学校部活動における回顧調査をもとに、中学校部活動における指導者からの暴力被害を規定する要因について検討している。その結果、①男女ともに指導者の指導態度が暴力被害の要因となっていること、②男子については、対外的に高い成績を残している強豪運動部に所属していたことや、部活動内で役割を有していた者、中学校生活において逸脱志向が高い者において、指導者からの暴力被害の確率が高まること、③女子については、部員自身が規律を重視し勝利追求を志向する運動部活動に所属していた場合、指導者からの暴力被害の確率が高まること、などが明らかとなっている。

さらに、藤井（2013）は、体罰をした教員を擁護する保護者たちの問題を指摘している。2012年、大阪市の公立高校のバスケットボール部のキャプテンであった男子生徒が、当時の顧問教諭による体罰を苦に自殺する事件が起きた。この事件で注目されるのは、保護者らが教育

委員会に対して、顧問教諭への寛大な処分を求める嘆願書を提出したことである。このことは、体罰がなぜなくならないのかという問題を考えるにあたり、教員の資質に目を向けるだけでは不十分であり、体罰を許容する側にも目を向ける必要があることを示唆している。

次に、教員の多忙化についてである。「OECD 国際教員指導環境調査」(TALIS)<sup>(2)</sup>によると、教員の仕事時間（直近の「通常の一週間」において仕事に従事した時間の平均）の合計は53.9時間であり、参加国平均の38.3時間を大きく上回っている。また、仕事時間の内訳を見ても、日本の教員が諸外国の教員と比べて時間を多く取られているのは、「課外活動の指導（例：放課後のスポーツ活動や文化活動）に使った時間」であることがわかる（参加国平均は2.1時間である一方で、日本は7.7時間）。先述したように、部活動は、その教育的意義を認められてはいるものの、正規のカリキュラムに組み込まれた活動ではない。それにもかかわらず、日本の教員は部活動の指導に大きな時間をとられており、そのことが教員の多忙化を促す一因となっているのである<sup>(3)</sup>。

このように、部活動については肯定的側面だけではなく否定的側面も指摘されてはいるものの、取り残された課題がある。それは、部活動におけるいじめである。先行研究を見ても、部活動におけるいじめを直接検討した研究は、管見する限りほとんど見当たらない<sup>(4)</sup>。ただし、部活動は決していじめと無縁ではない。スポーツ庁（2018）によれば、部活動における悩みとして「他の生徒との関係」をあげる中学生の割合は、他の項目と比して比較的高い値となっている（運動部所属生徒で10.5%、文化部所属生徒で15.6%）。また、2018年、東京都八王子市で市立中学校の女子生徒が、8月に自殺を図り、9月に死亡した。この件について、学校側は市教育委員会に対し、「部活動でいじめがあった」と報告していた（朝日新聞デジタル 2018年11月6日）。これらのことからもうかがえるように、部活動は子どもたちの学校への適応や資質・能力育成の場として機能するだけでなく、部活動を取り巻く状況如何によっては、対人関係上のトラブル、ひいては、いじめの場となる危険性を有していると言えるだろう。

以上を踏まえると、部活動におけるいじめに影響を及ぼす要因を検討することは、今後の部活動のあり方を考える上で急務の課題であると言える。この点からも本研究の意義は認められよう。

## 2. 方法

### (1) 分析の枠組み

本研究では、部活動におけるいじめに影響を及ぼす要因として、主には次の点に着目する。第1に、部活動指

導者の特性と部活動内の雰囲気である。先述したように、部活動におけるいじめに着目した研究は極めて少ない。その一方で、教室におけるいじめに着目した研究は学問分野の壁を超えて幅広く行われている。なかでも、とりわけ多いのは、学級集団特性に着目した研究である<sup>(5)</sup>。これらの研究により、学級集団のあり様によっていじめの発生状況が大きく左右されることが明らかとなっている(高木 1986, 滝 1996, 森田ほか編 1999, 大西ほか 2009, 久保田 2013など)。また、先行研究により、教師の指導態度によって学級集団のあり様が左右されることも確認されている(佐藤 1993, 三島・宇野 2004, 岸野・無藤 2009など)。

以上の先行研究の結果に鑑みれば、部活動内の雰囲気によっていじめの発生状況が左右されるとともに、部活動指導者の特性が部活動内の雰囲気を介して間接的にいじめの発生状況に影響を及ぼす可能性は十分に考えられよう。また、部活動指導者の特性が直接的にいじめの発生状況を左右する可能性も否定できない。

第2に、部活動における先輩後輩関係である。部活動が学級集団と大きく異なる点は、学年やクラスの枠を超えて組織される異年齢集団である、ということである。当然のことながら、異年齢集団で活動を行うことの意義はあるが、その一方で、部活動については、部員間でヒエラルキー的な支配・従属関係が生じる可能性も指摘されている。このような部員間の上下関係は、いじめへと発展する危険性もあると考えられる。なぜなら、森田(1999)は、いじめの操作的定義を構成する要素として、①被害の発生、②被害の継続性ないしは反復性、③力関係のアンバランス、という3つをあげており<sup>(6)</sup>、このうち「力関係のアンバランス」をいじめという現象の本質を規定する重要な要素である、としているからである。

以上を踏まえた本研究における分析モデルを簡素化したものが、図1である。

## (2) 調査対象

調査の実施時期は、2017年12月である。調査用紙は授業時間中に配布し、授業終了後に回収した。調査対象

は、中部地方にある国立X大学に在籍する学生381名である。男女比は、男性56.7% (216名)、女性43.3% (165名)である。

調査対象者に対しては、中学生時の部活動経験について尋ねた。部活動に参加していた経験のある者は、男性で89.4% (193名)、女性で95.8% (158名)の計351名である。

以下の分析では、中学生時に部活動に参加していた経験のある者のみを分析対象とする。

## 3. 結果

### (1) 部活動の種類・規模・活動日数・対外成績

表1は、最も長い期間所属していた部活動を尋ねた結果である<sup>(7)</sup>。所属していた者の割合が10%を超えている部活動に着目してみると、男性では「サッカー部」「バスケットボール部」「野球部」の3つとなっている。一方、女性では「バスケットボール部」「バレーボール部」「吹奏楽部」の3つとなっている。

男女ともに運動部系の団体競技に所属していた者が多いが、女性では「吹奏楽部」に所属していた者が相当数見られる(女性全体の20.9%)。

表2は、表1で示した部活動を「運動部系」と「文化部系」の2つに分類し、その割合を男女で比較した結果である<sup>(8)</sup>。男女で統計的に有意な差が見られ( $p < 0.001$ )、男性は女性と比べ「運動部系」に所属している者が多い一方で、女性は男性と比べ「文化部系」に所属している者が多い。

表3は、部活動の規模(人数)を男女で比較した結果である。男女ともに、部員数が10人に満たないケースは少なく、「10~19人」および「20~29人」のケースが多く見られる。なお、男女で統計的に有意な差は見られなかった。

表4は、1週間当たりの部活動の活動日数を男女で比較した結果である。男女ともに、「5~6日程度」が最も多く、全体の75%程度を占めている。なお、男女で統計的に有意な差は見られなかった。

図1 分析モデル

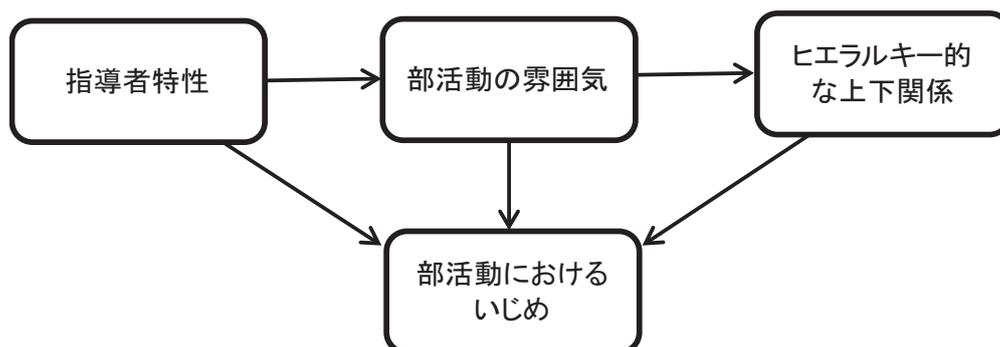


表5は、部活動の対外成績（最も良かった成績、個人競技の場合は自身の成績）を尋ねた結果である。男女で統計的に有意な差が見られ（ $p < 0.05$ ）、男性は女性と比べ「市などの地区大会出場」が多い一方で、女性は男性と比べ「大会不参加」が多い。これは、先に示したように、女性は男性に比べ「文化部系」の部活動に所属している者が多いことと無関係ではないと考えられる。「文化部系」の部活動のなかには、競技志向性の低いも

のがあるからである。

## (2) 部活動指導者の特性<sup>(9)</sup>

部活動指導者の特性については、「指導態度」と「部員に対する暴言・暴力」の2つの側面から検討する。

第1に、指導態度についてである。まず、指導態度を構成する項目について男女で比較を行った（t検定）が、いずれの項目についても統計的に有意な差は見られな

表1 所属していた部活動の種類1

	男性	女性		男性	女性
サッカー部	15.0%	.0%	剣道部	3.1%	3.2%
ソフトテニス部	8.3%	7.6%	柔道部	1.6%	1.3%
ソフトボール部	.0%	4.4%	水泳部	.5%	1.3%
卓球部	6.7%	6.3%	体操部	.0%	.6%
テニス部	.5%	1.9%	陸上競技部	9.3%	8.9%
バスケットボール部	10.9%	12.7%	合唱部	.0%	1.3%
バドミントン部	4.7%	4.4%	科学部	2.6%	.0%
バレーボール部	5.2%	12.0%	茶道部	.0%	4.4%
ハンドボール部	2.1%	.6%	吹奏楽部	3.1%	20.9%
野球部	22.3%	.0%	美術部	1.0%	3.8%
空手道部	.5%	.0%	放送部	.0%	.6%
弓道部	.0%	.6%	その他	2.6%	3.2%

※ 「その他」と回答した者については、どのような部活動に所属していたのかを自由記述形式で回答してもらった。なお、10%を超えるものについては、網掛けをしている。

表2 所属していた部活動の種類2

	運動部系	文化部系	合計
男性	92.7%	7.3%	100.0%***
女性	67.7%	32.3%	100.0%

※ \* $p < 0.05$ 、\*\* $p < 0.01$ 、\*\*\* $p < 0.001$ 。以下同様。

表3 部活動の規模（人数）

	男性	女性
9人以下	4.7%	3.8%
10～19人	29.5%	37.3%
20～29人	29.5%	27.2%
30～39人	19.7%	15.2%
40人以上	16.6%	16.5%
合計	100.0%	100.0%

表4 部活動の活動日数

	男性	女性
ほとんど活動していなかった	.0%	.6%
1～2日程度	.5%	4.4%
3～4日程度	6.7%	4.4%
5～6日程度	74.6%	74.1%
7日	18.1%	16.5%
合計	100.0%	100.0%

表5 部活動の対外成績

	男性	女性
大会不参加	2.6%	9.5%*
市などの地区大会出場	45.6%	32.9%
県大会出場	36.3%	38.0%
(北信越、関東などの) ブロック大会出場	8.8%	12.7%
全国大会出場	6.7%	7.0%
合計	100.0%	100.0%

かった。

次に、指導態度の構造的把握を行うために、因子分析を行った。方法としては、因子数を2～4とし、主因子法により因子を抽出し、因子の解釈のしやすさから2因子解を採用した。また、因子負荷量の絶対値が複数の因子において0.4以上であった項目を削除した後に、再び主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。その結果が表6である。

第1因子で負荷が高かったのは、「部の指導者は、部員一人ひとりの意思や意見を大切にしていた」(0.859)、「部の指導者は、部員が相談すると部員の気持ちになって考えてくれた」(0.815)、「部の指導者は、部員から信頼されていた」(0.741)、「部の指導者は、部員の主体性に任せて活動を行わせようとしていた」(0.494)の4項目であった(カッコ内の数値は因子負荷量。以下同様)。そこで、この因子を「部員との人間関係を重視するとともに、部員の主体性を尊重している」という意味で、「人間関係・主体性重視」と命名した。

第2因子で負荷が高かったのは、「部の指導者は、技術指導に厳しかった」(0.833)、「部の指導者は、部の規

則を守ることに厳しかった」(0.749)、「部の指導者は、礼儀指導に力を入れていた」(0.630)、「部の指導者の指示には、どんなことでも従わなければならなかった」(0.613)、「部の指導者は、休まず活動に参加していた」(0.430)の5項目であった。そこで、この因子を「部員に対して厳しく、かつ権威的に指導している」という意味で、「厳格・権威的指導」と命名した。

次に、部員に対する暴言・暴力についてである。まず、部員に対する暴言・暴力に関する2項目について男女で比較を行った(t検定)ところ、いずれの項目についても統計的に有意な差が見られた(表7)。「部の指導者は、部員に対して暴言を吐いていた」(t(347) = 2.097, p < 0.05)、「部の指導者は、部員に対して暴力を振るっていた」(t(347) = 4.261, p < 0.001)の双方の項目において、男性は女性と比べ、平均値が高かった。

これらの結果より、男性は女性と比べ、指導者による暴言や暴力を受けやすい傾向にあることがうかがえる。

次に、これら2項目について主成分分析を行ったところ、一元性が確認された(表8)。そこで、この成分を「指導者による暴言・暴力」と命名した。

表6 指導態度の因子分析結果

	人間関係・主体性重視	厳格・権威的指導
部の指導者は、部員一人ひとりの意思や意見を大切にしていた	.859	.057
部の指導者は、部員が相談すると部員の気持ちになって考えてくれた	.815	.173
部の指導者は、部員から信頼されていた	.741	.232
部の指導者は、部員の主体性に任せて活動を行わせようとしていた	.494	-.072
部の指導者は、技術指導に厳しかった	.043	.833
部の指導者は、部の規則を守ることに厳しかった	.106	.749
部の指導者は、礼儀指導に力を入れていた	.243	.630
部の指導者の指示には、どんなことでも従わなければならなかった	-.248	.613
部の指導者は、休まず活動に参加していた	.286	.430
固有値	2.410	2.304
寄与率	26.8	25.6

※ 「まったくあてはまらない」～「とてもあてはまる」に1～5の得点を配分。

表7 部員に対する暴言・暴力

		人数	平均値	標準偏差
部の指導者は、部員に対して暴言を吐いていた	男性	191	2.39	1.276*
	女性	158	2.11	1.198
部の指導者は、部員に対して暴力を振るっていた	男性	191	1.80	1.203***
	女性	158	1.33	.735

※ 「まったくあてはまらない」～「とてもあてはまる」に1～5の得点を配分。

表8 指導者による暴言・暴力の主成分分析結果

	指導者による 暴言・暴力
部の指導者は、部員に対して暴言を吐いていた	.896
部の指導者は、部員に対して暴力を振るっていた	.896
固有値	1.607
寄与率	80.3

※ 「まったくあてはまらない」～「とてもあてはまる」に1～5の得点を配分。

(3) 部活動の雰囲気<sup>(10)</sup>

まず、部活動の雰囲気に関する項目について男女で比較を行った (t検定)。その結果、次の3項目において統計的に有意な差が見られた (表9)。「部員同士、誰とも協力しあって活動することができていた」(t(346) = 2.390, p < 0.05)、「部の目標は、大会やコンクールなどで勝ち進むことであった」(t(349) = 3.074, p < 0.01)、「部員はお互い素直に自分の意見を言うことができていた」(t(349) = 2.436, p < 0.05) の3項目いずれにおいても、男性は女性と比べ、平均値が高かった。

これらの結果より、男性主体の部活動は女性主体の部活動と比べ、民主的な運営がされているとともに勝利を追求する傾向にあるといえる。

次に、部活動の雰囲気の構造的把握を行うために、因子分析を行った。方法としては、因子数を2～4とし、主因子法により因子を抽出し、因子の解釈のしやすさから2因子解を採用した。また、因子負荷量の絶対値が複数の因子において0.4以上であった項目を削除した後に、再び主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。その結果が表10である。

第1因子で負荷が高かったのは、「部にはお互いを尊重し合う雰囲気があった」(0.836)、「何か困ったことがあると、部員同士で話し合って解決した」(0.779)、「困っている部員がいたら、お互い助け合うことができていた」(0.758)、「部員はお互い素直に自分の意見を言うことができていた」(0.728)、「部員同士、誰とも協力しあって活動することができていた」(0.706)、「部には安心して失敗することができる雰囲気があった」

(0.532)、「部の目標は、部員が楽しく活動することであった」(0.528)、「他の部員を注意するとき、言葉で伝え合うことができていた」(0.475) の8項目であった

表10 部活動内の雰囲気の因子分析結果

	認め合い・高め合い	規律・勝利追求志向
部にはお互いを尊重し合う雰囲気があった	.836	.096
何か困ったことがあると、部員同士で話し合って解決した	.779	.072
困っている部員がいたら、お互い助け合うことができていた	.758	.277
部員はお互い素直に自分の意見を言うことができていた	.728	.107
部員同士、誰とも協力しあって活動することができていた	.706	.316
部には安心して失敗することができる雰囲気があった	.532	-.379
部の目標は、部員が楽しく活動することであった	.528	-.330
他の部員を注意するとき、言葉で伝え合うことができていた	.475	.271
部員は部の規則を守ることに厳しかった	.172	.749
大会やコンクールなどで良い成績を残せないと、陰悪な雰囲気になった	-.130	.604
部の目標は、大会やコンクールなどで勝ち進むことであった	.154	.580
部員は休まずに活動に参加していた	.292	.570
固有値	3.853	2.116
寄与率	32.1	17.6

※ 「まったくあてはまらない」～「とてもあてはまる」に1～5の得点を配分。

表9 部活動の雰囲気

		人数	平均値	標準偏差	
部員同士、誰とも協力しあって活動することができていた	男性	190	3.85	.916	*
	女性	158	3.60	1.003	
部の目標は、大会やコンクールなどで勝ち進むことであった	男性	193	3.78	.997	**
	女性	158	3.41	1.302	
部員はお互い素直に自分の意見を言うことができていた	男性	193	3.63	.987	*
	女性	158	3.35	1.106	

※ 「まったくあてはまらない」～「とてもあてはまる」に1～5の得点を配分。

(カッコ内の数値は因子負荷量。以下同様)。そこで、この因子を“部員がお互いを認め合い、話し合いや協力をすることによって集団全体を高め合おうとしている”という意味で「認め合い・高め合い」と命名した。

第2因子で負荷が高かったのは、「部員は部の規則を守ることに厳しかった」(0.749)、「大会やコンクールなどで良い成績を残せないと、険悪な雰囲気になった」(0.604)、「部の目標は、大会やコンクールなどで勝ち進むことであった」(0.580)、「部員は休まずに活動に参加していた」(0.570)の4項目であった。そこで、この因子を“規律を守ること厳しく、大会やコンクールなどで勝利することを重視している”という意味で「規律・勝利追求志向」と命名した。

#### (4) 部活動における先輩後輩関係<sup>1)</sup>

まずは、部活動における先輩後輩関係に関する項目について男女で比較を行った(t検定)。その結果、次の4項目において統計的に有意な差が見られた(表11)。「後輩は先輩よりも早く練習に来なければならなかった」(t(349) = -3.428, p < 0.001)、「何事にも先輩が優先であった」(t(349) = -5.098, p < 0.001)、「先輩の言うことは何事も絶対であった」(t(348) = -5.612, p < 0.001)、「後輩は制服、ジャージ、カバンなどの身なり

が制限されていた」(t(349) = -5.380, p < 0.001)という4項目いずれにおいても、女性は男性に比べ、平均値が高かった。

これらの結果より、女性主体の部活動は男性主体の部活動と比べ、先輩後輩間にヒエラルキー的な上下関係が存在する傾向にあることがうかがえる。

次に、先輩後輩関係に関する6項目について主成分分析を行ったところ、一元性が確認された(表12)。そこで、この成分を「ヒエラルキー的な上下関係」と命名した。

#### (5) 部活動におけるいじめ

表13は、所属している部活動におけるいじめについて尋ねた結果である(単純集計結果)。「あった」と回答した者の割合が最も高いのは、「同級生は他の同級生を無視したり、仲間はずれにしたりしていた」(19.8%)であり、それに次いで多いのが「同級生は他の同級生に対して直接悪口を言っていた」(18.3%)、「先輩は後輩に対して直接悪口を言っていた」(17.2%)となっている。

次に、部活動におけるいじめに関する項目について男女で比較を行った(t検定)。その結果、次の5項目において統計的に有意な差が見られた(表14)。「先輩は後輩を叩いたり蹴ったりしていた」(t(347) = 6.395, p <

表11 部活動における先輩後輩関係

		人数	平均値	標準偏差	
後輩は先輩よりも早く練習に来なければならなかった	男性	193	2.53	1.381	***
	女性	158	3.05	1.436	
何事にも先輩が優先であった	男性	193	2.82	1.331	***
	女性	158	3.56	1.352	
先輩の言うことは何事も絶対であった	男性	192	2.48	1.274	***
	女性	158	3.27	1.323	
後輩は制服、ジャージ、カバンなどの身なりが制限されていた	男性	193	1.95	1.200	***
	女性	158	2.74	1.540	

※ 「まったくあてはまらない」～「とてもあてはまる」に1～5の得点を配分。

表12 部活動における先輩後輩関係の主成分分析結果

	ヒエラルキー的な上下関係
何事にも先輩が優先であった	.906
先輩の言うことは何事も絶対であった	.873
後輩は先輩よりも早く練習に来なければならなかった	.831
後輩は練習の準備と後片付けを行っていた	.726
後輩は制服、ジャージ、カバンなどの身なりが制限されていた	.724
後輩は遠征やその他の移動の際に、先輩の荷物を持たなければならなかった	.619
固有値	3.708
寄与率	61.8

※ 「まったくあてはまらない」～「とてもあてはまる」に1～5の得点を配分。

表13 部活動におけるいじめ1

	あった
先輩は後輩を叩いたり蹴ったりしていた	7.7
先輩は後輩に対して直接悪口を言っていた	17.2
先輩は後輩の物を壊す、隠すなどの嫌がらせをしていた	4.3
先輩は後輩を無視したり、仲間はずれにしたりしていた	9.5
同級生は他の同級生を叩いたり蹴ったりしていた	5.7
同級生は他の同級生に対して直接悪口を言っていた	18.3
同級生は他の同級生の物を壊す、隠すなどの嫌がらせをしていた	6.9
同級生は他の同級生を無視したり、仲間はずれにしたりしていた	19.8

※ 「よくあった」「ときどきあった」を合計したパーセンテージ。

表14 部活動におけるいじめ2

		人数	平均値	標準偏差	
先輩は後輩を叩いたり蹴ったりしていた	男性	192	1.77	1.108	***
	女性	157	1.16	.474	
先輩は後輩の物を壊す、隠すなどの嫌がらせをしていた	男性	192	1.55	.908	**
	女性	157	1.28	.724	
同級生は他の同級生を叩いたり蹴ったりしていた	男性	192	1.79	1.072	***
	女性	157	1.15	.464	
同級生は他の同級生の物を壊す、隠すなどの嫌がらせをしていた	男性	192	1.67	.999	**
	女性	157	1.39	.861	
同級生は他の同級生を無視したり、仲間はずれにしたりしていた	男性	192	1.81	1.153	*
	女性	157	2.14	1.370	

※ 「まったくあてはまらない」～「とてもあてはまる」に1～5の得点を配分。

0.001)、「先輩は後輩の物を壊す、隠すなどの嫌がらせをしていた」( $t(347) = 2.984, p < 0.01$ )、「同級生は他の同級生を叩いたり蹴ったりしていた」( $t(347) = 7.018, p < 0.001$ )、「同級生は他の同級生の物を壊す、隠すなどの嫌がらせをしていた」( $t(347) = 2.689, p < 0.01$ )の4項目については、男性は女性と比べ、平均値が高かった。一方、「同級生は他の同級生を無視したり、仲間はずれにしたりしていた」( $t(347) = -2.464, p < 0.05$ )については、女性は男性と比べ、平均値が高かった。

これらの結果より、男性主体の部活動は女性主体の部活動と比べ、いじめが多く発生している可能性がうかがえる。また、女性主体の部活動は男性主体の部活動と比べ、同級生同士の無視・仲間はずれといった関係性攻撃が多く行われる可能性のあることがわかる。

さらに、部活動におけるいじめに関する項目について主成分分析を行ったところ、一元性が確認された(表15)。そこで、この成分を「部活動におけるいじめ」と命名した。

#### (6) 部活動におけるいじめに影響を及ぼす要因の検討(重回帰分析)

ここでは、部活動におけるいじめに影響を及ぼす要因について検討するために、重回帰分析を行う。分析を行うにあたっては、男女で影響要因が異なる可能性を考慮し、男女別の分析を行う。

分析に使用する変数の詳細は、以下の通りである(表16)。

表17は、「部活動におけるいじめ」を従属変数、その他の変数を独立変数とした重回帰分析の結果である。男女ともに、「ヒエラルキー的な上下関係」が有意な正の影響を及ぼしていた(男女ともに、 $p < 0.001$ )。また、男女ともに、「認め合い・高め合い」が有意な負の影響を及ぼしていた(男性： $p < 0.001$ 、女性： $p < 0.001$ )。

これらの結果より、部活動の主たる構成員の性別に関わりなく、①部活動内の先輩後輩の間に確固たる上下関係が存在している場合に、部活動におけるいじめが起りやすいこと、②部活動内に「部員がお互いを認め合い、話し合いや協力をすることによって集団全体を高め合おうとする」雰囲気醸成されている場合に、部活動にお

表15 部活動におけるいじめの主成分分析結果

	部活動における いじめ
同級生は他の同級生の物を壊す、隠すなどの嫌がらせをしていた	.796
同級生は他の同級生に対して直接悪口を言っていた	.779
先輩は後輩の物を壊す、隠すなどの嫌がらせをしていた	.772
先輩は後輩に対して直接悪口を言っていた	.748
同級生は他の同級生を無視したり、仲間はずれにしたりしていた	.723
同級生は他の同級生を叩いたり蹴ったりしていた	.723
先輩は後輩を叩いたり蹴ったりしていた	.710
先輩は後輩を無視したり、仲間はずれにしたりしていた	.684
固有値	4.416
寄与率	55.2

※ 「まったくあてはまらない」～「とてもあてはまる」に1～5の得点を配分。

表16 分析に使用する変数の詳細

運動部系・文化部系	運動部系部活動の場合には1、文化部系部活動の場合には0のダミー変数(表2)。
部活動の規模(人数)	「9人以下」～「40人以上」に1～5の得点を配分(表3)。
活動日数	「ほとんど活動していなかった」～「7日」に1～5の得点を配分(表4)。
対外成績	「大会不参加」～「全国大会出場」に1～5の得点を配分(表5)。
厳格・権威的指導	主な指導者の指導態度に関する項目について因子分析を行った結果得られた2つの因子得点(表6)。
人間関係・主体性重視	
部員に対する暴言・暴力	主な指導者による部員に対する暴言・暴力に関する項目について主成分分析を行った結果得られた主成分得点(表8)。
認め合い・高め合い	部活動内の雰囲気に関する項目について因子分析を行った結果得られた2つの因子得点(表10)。
規律・勝利追求志向	
ヒエラルキー的な上下関係	部活動における先輩後輩関係に関する項目について主成分分析を行った結果得られた主成分得点(表12)。
部活動におけるいじめ	部活動におけるいじめに関する項目について主成分分析を行った結果得られた主成分得点(表15)。

表17 部活動におけるいじめに影響を及ぼす要因の検討

	男性					女性				
	B	標準偏差 誤差	$\beta$	t		B	標準偏差 誤差	$\beta$	t	
(定数)	.115	.734		.157						-1.903
運動部系・文化部系	.172	.294	.042	.583		.105	.141	.061	.749	
部活動の規模(人数)	.039	.068	.041	.571		.117	.056	.167	2.090	*
活動日数	-.118	.158	-.054	-.746		.001	.102	.001	.009	
対外成績	.112	.085	.094	1.313		.050	.068	.063	.738	
人間関係・主体性重視 (指導態度)	.099	.101	.083	.982		-.014	.079	-.016	-.174	
厳格・権威的指導(指導態度)	-.064	.124	-.053	-.518		.004	.085	.005	.046	
部員に対する暴言・暴力 (指導者特性)	.202	.092	.199	2.204	*	.112	.089	.113	1.256	
認め合い・高め合い(部活動内の雰囲気)	-.283	.092	-.234	-3.091	**	-.293	.071	-.358	-4.141	***
規律・勝利追求志向 (部活動内の雰囲気)	-.053	.129	-.041	-.409		-.163	.096	-.186	-1.691	
ヒエラルキー的な上下関係 (先輩後輩関係)	.413	.103	.336	3.997	***	.255	.068	.323	3.731	***
調整済みR <sup>2</sup>	0.180					0.259				
F値	4.965***					6.447***				

けるいじめが起りにくいこと、がうかがえる。

一方、男性については「部員に対する暴言・暴力」(p < 0.05)が、女性については「部活動の規模(人数)」(p < 0.05)が、有意な正の影響を及ぼしていた。この結果より、男性主体の部活動では、主な指導者が部員に対して暴言を吐いたり暴力を振るったりしている場合、女性主体の部活動では、部活動の規模(人数)が多い場合に、部活動におけるいじめが起りやすいといえる。

以上の結果より、「認め合い・高め合い」(部活動内の雰囲気)と「ヒエラルキー的な上下関係」(先輩後輩関係)の2つが、男女に関わりなく、部活動におけるいじめの発生状況を大きく左右する要因であることがわかる。

そこで、次に、「認め合い・高め合い」(部活動内の雰囲気)と「ヒエラルキー的な上下関係」(先輩後輩関係)のそれぞれに影響を及ぼす要因について検討することとしたい(分析モデルについては、図1を参照のこと)。

まずは、「認め合い・高め合い」(部活動内の雰囲気)を従属変数とした重回帰分析の結果についてである(表18)。男女ともに、「人間関係・主体性重視」が有意な正の影響を及ぼしていた(男女ともに、p < 0.001)。これらの結果より、部活動の主たる構成員の性別に関わりなく、主な指導者が「部員との人間関係を重視するとともに、部員の主体性を尊重している」場合に、部活動内に「部員がお互いを認め合い、話し合いや協力をする」ことによって集団全体を高め合おうとする”雰囲気が醸成されやすいことがうかがえる。

また、女性については、「厳格・権威的な指導」も有

意な正の影響を及ぼしていた。この結果より、女性主体の部活動においては、主な指導者が“部員に対して厳しく、かつ権威的に指導している”場合についても、部活動内に“部員がお互いを認め合い、話し合いや協力をすることによって集団全体を高め合おうとする”雰囲気が醸成されやすいことがわかる。

次に、「ヒエラルキー的な上下関係」(先輩後輩関係)を従属変数とした重回帰分析の結果についてである(表19)。男女ともに、「規律・勝利追求志向」が有意な正の影響を及ぼしていた(男女ともに、p < 0.001)。これらの結果より、部活動の主たる構成員の性別に関わりなく、部活動内に“規律を守ることに厳しく、大会やコンクールなどで勝利することを重視する”雰囲気がある場合に、部活動内の先輩後輩間でヒエラルキー的な人間関係が形成されやすいことがうかがえる。

また、男性については、「厳格・権威的な指導」も有意な正の影響を及ぼしていた(p < 0.05)。この結果より、男性主体の部活動においては、主な指導者が“部員に対して厳しく、かつ権威的に指導している”場合についても、部活動内の先輩後輩間でヒエラルキー的な人間関係が生まれやすいことがわかる。

以上の分析結果(表17～表19)を踏まえ、部活動におけるいじめに影響を及ぼす直接的・間接的な要因を図式化したものが、図2および図3である。

これらの図により、部活動におけるいじめに直接的な影響を及ぼす要因だけではなく、間接的な影響を及ぼす要因を視覚的に確認することができる。直接的な影響を及ぼす要因についてはすでに言及しているため、以下で

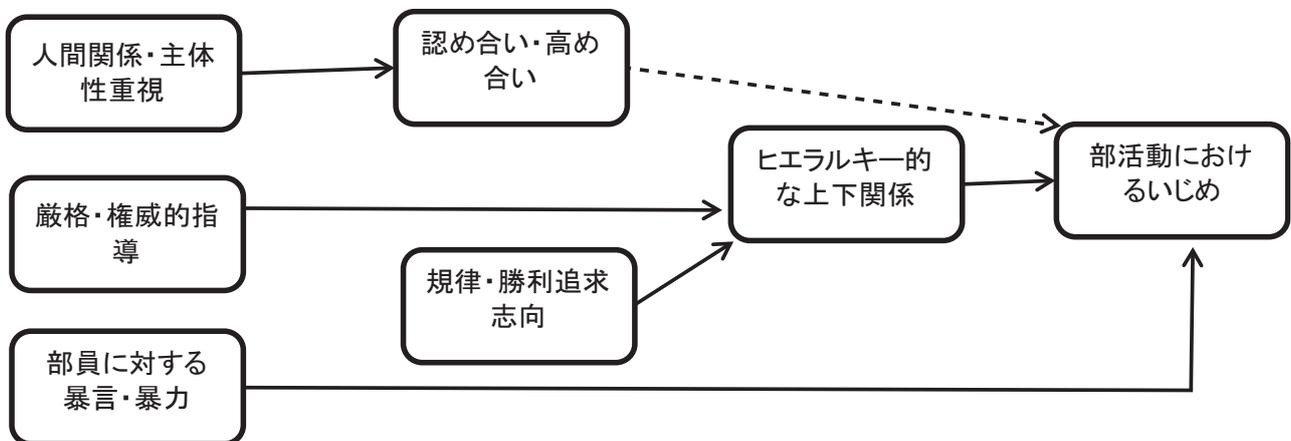
表18 「認め合い・高め合い」(部活動内の雰囲気)に影響を及ぼす要因の検討

	男性					女性				
	B	標準偏差 誤差	$\beta$	t		B	標準偏差 誤差	$\beta$	t	
(定数)	-.538	.591		-909		.888	.461		1.927	
運動部系・文化部系	-.134	.239	-.039	-561		-.154	.161	-.073	-.955	
人数	-.078	.055	-.099	-1.414		.033	.065	.038	.507	
活動日数	.196	.129	.110	1.525		-.224	.114	-.151	-1.959	
対外成績	.064	.069	.066	.931		-.027	.075	-.028	-.358	
人間関係・主体性重視 (指導態度)	.414	.077	.421	5.361	***	.540	.077	.516	7.002	***
厳格・権威的指導(指導 態度)	.063	.083	.063	.765		.258	.084	.244	3.081	**
部員に対する暴言・暴力 (指導者特性)	.049	.075	.059	.655		-.032	.103	-.027	-.316	
調整済みR2	0.170					0.327				
F値	6.363***					7.872***				

表19 「ヒエラルキー的な上下関係」に影響を及ぼす要因の検討

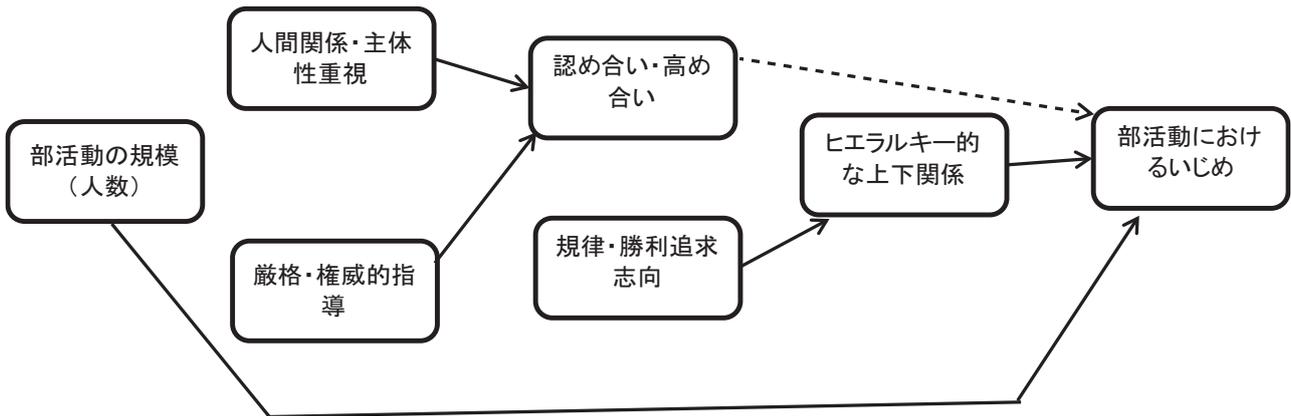
	男性					女性				
	B	標準偏差 誤差	$\beta$	t		B	標準偏差 誤差	$\beta$	t	
(定数)	-.021	.542		-.038		-.228	.511		-.446	
運動部系・文化部系	.340	.216	.101	1.577		.311	.167	.142	1.860	
人数	-.040	.050	-.051	-.791		-.053	.067	-.060	-.790	
活動日数	-.031	.116	-.017	-.265		.131	.123	.085	1.070	
対外成績	-.113	.062	-.117	-1.819		-.021	.081	-.021	-.260	
人間関係・主体性重視 (指導態度)	-.014	.074	-.015	-.194		-.075	.095	-.069	-.789	
厳格・権威的指導(指導 態度)	.190	.090	.192	2.113	*	-.087	.101	-.080	-.861	
部員に対する暴言・暴力 (指導者特性)	.109	.067	.131	1.625		-.018	.107	-.015	-.171	
認め合い・高め合い(部 活動内の雰囲気)	-.082	.067	-.082	-1.209		-.072	.085	-.069	-.843	
規律・勝利追求志向(部 活動内の雰囲気)	.398	.089	.378	4.447	***	.631	.103	.569	6.145	***
調整済みR2	0.330					0.329				
F値	10.966***					9.564***				

図2 部活動におけるいじめに影響を及ぼす要因(男性)



※ 有意なパスのみを示している。なお、実線の矢印は正の影響を、点線の矢印は負の影響をそれぞれ示している。以下同様。

図3 部活動におけるいじめに影響を及ぼす要因（女性）



は間接的な影響を及ぼす要因に着目して論じることとしたい。

第1に、主な指導者の指導態度についてである。指導態度については男女ともに部活動におけるいじめに直接的な影響を及ぼしてはなかった(表17)ものの、間接的な影響を及ぼしていることがわかる。男女ともに、「人間関係・主体性重視」(指導態度)は、「認め合い・高め合い」(部活動内の雰囲気)を経由して、部活動におけるいじめに負の間接的な影響を及ぼしている。また、女性については、「厳格・権威的指導」(指導態度)も「認め合い・高め合い」(部活動内の雰囲気)を経由して、部活動におけるいじめに負の間接的な影響を及ぼしていることがうかがえる。

これらの結果により、部活動の主たる構成員の性別に関わりなく、主な指導者が“部員との人間関係を重視するとともに、部員の主体性を尊重している”場合に、部活動内に“部員がお互いを認め合い、話し合いや協力をすることによって集団全体を高め合おうとする”雰囲気が醸成され、結果として部活動におけるいじめが生じにくくなることがわかる。また、女性主体の部活動においては、主な指導者が“部員に対して厳しく、かつ権威的に指導している”場合についても、「人間関係・主体性重視」(指導態度)と同様に、部活動におけるいじめを生じにくくする間接的な影響を確認することができる。

その一方で、男性については、「厳格・権威的指導」(指導態度)は「ヒエラルキー的な上下関係」(先輩後輩関係)を経由して、部活動におけるいじめに正の間接的な影響を及ぼしている。この結果は、女性主体の部活動とは異なり、男性主体の部活動では、主な指導者が“部員に対して厳しく、かつ権威的に指導している”場合に、部活動内の先輩後輩間でヒエラルキー的な人間関係が形成され、結果として部活動におけるいじめが生じやすくなることを示唆している。

第2に、部活動内の雰囲気についてである。男女ともに、「規律・勝利追求志向」(部活動内の雰囲気)が「ヒ

エラルキー的な人間関係」(先輩後輩関係)を経由して、部活動におけるいじめに正の間接的な影響を及ぼしている。

これらの結果により、部活動の主たる構成員の性別に関わりなく、部活動内に“規律を守ることに厳しく、大会やコンクールなどで勝利することを重視する”雰囲気がある場合に、部活動内の先輩後輩間でヒエラルキー的な人間関係が形成され、結果として部活動におけるいじめが生じやすくなることがうかがえる。

#### 4. まとめと考察

本研究の目的は、大学生を対象とした回顧調査をもとに、中学生時の部活動におけるいじめに影響を及ぼす要因を検討することにあつた。本研究によって明らかとなった主要な結果は、以下のように要約されよう。

##### (1) 部活動におけるいじめの実態

部活動におけるいじめについては、先輩から後輩へのいじめと同級生同士のいじめという2つの側面から把握を試みた。その結果、主には次の3点が明らかとなった。

第1に、部活動におけるいじめが「あつた」と回答した者の割合は、各項目で4%~20%の間を推移していた(表13)。先行研究では部活動におけるいじめについてほとんど検討されてこなかったものの、この結果より、部活動におけるいじめは一定数存在することがわかる。

第2に、男女の違いについてである(表14)。男性主体の部活動は女性主体の部活動と比べ、いじめが多く発生している可能性がうかがえた。また、女性主体の部活動は男性主体の部活動と比べ、同級生同士の無視・仲間はずれといった関係性攻撃が多く見られる傾向にあつた。この結果は、部活動におけるいじめについて検討するにあたり、男女の違いを考慮する必要があることを示唆している。

第3に、部活動におけるいじめに関する項目について主成分分析を行ったところ、一元性が確認された(表15)。この結果は、先輩から後輩へのいじめと同級生同士のいじめとは、決して無関係ではないことを物語っている。

## (2) 部活動におけるいじめに影響を及ぼす要因

部活動におけるいじめに影響を及ぼす要因を男女別に検討したところ、男女で幾分の違いが見られたものの、男女で共通している部分がかかなりの程度見られた(表17～表19、図1、図2)。そこで、以下では、男女で共通する要因について中心的に論じることとした。

第1に、「ヒエラルキー的な上下関係」(先輩後輩関係)についてである。部活動の主たる構成員の性別に関わりなく、部活動内の先輩後輩関係の間に確固たる上下関係が存在している場合に、部活動におけるいじめは起こりやすい傾向にあった。その理由としては、次のようなことが考えられる。一つは、ヒエラルキー的な上下関係が部員(とりわけ下級生)にとってストレスとなることである。手塚・上地・児玉(2003)は、中学生を対象とした質問紙調査をもとに、運動部活動に関するストレスとして「部員との関係」<sup>12)</sup>があり、それが「不機嫌・怒り」というストレス反応を引き起こす可能性を明らかにしている。この結果に鑑みれば、先輩後輩間でヒエラルキー的な人間関係が存在している場合、そのことが部員にとってストレスとなり、いじめという攻撃行動を引き起こしている可能性を指摘できよう。

もう一つは、ヒエラルキー的な上下関係が存在している場合、上級生は下級生に対して力を濫用しやすい環境にある、ということである。「分析の枠組み」で述べた通り、いじめの操作的定義の構成要素のうち、最も重要視されているのは、被害者と加害者との間の「力関係のアンバランス」である。ヒエラルキー的な上下関係のもとでは、このような「力関係のアンバランス」が顕在化しており、結果としていじめが生じやすいものと推察される。

第2に、「規律・勝利追求志向」(部活動内の雰囲気)についてである。部活動の主たる構成員の性別に関わりなく、部活動内に“規律を守ることに厳しく、大会やコンクールなどで勝利することを重視する”雰囲気(「規律・勝利追求志向」)がある場合に、部活動内の先輩後輩間でヒエラルキー的な人間関係が形成され、結果として部活動におけるいじめが起こりやすい傾向にあった。小野・庄司(2015)は、中高生を対象とした質問紙調査をもとに、「部の方針・性格」が先輩後輩間のヒエラルキー的な人間関係に影響を及ぼす可能性を明らかにしている。「部の方針・性格」を構成する項目には、「部には

厳しい決まりや運営方針がある」「部として挨拶や礼儀を徹底している」といった、部活動内の規律に関する項目が含まれている<sup>13)</sup>。この結果に鑑みれば、「規律・勝利追求志向」という部活動内の雰囲気は、部全体の方針によって生み出されている可能性も否定できない。その場合、ヒエラルキー的な上下関係をできる限りフラットな関係に近づけるためには、主たる指導者の立ち会いのもと、部員同士が望ましい部活動のあり方について互いに協議することによって部全体の方針をあらためていくことが求められよう。このことは、とりわけ女性主体の部活動において必要であるといえるかもしれない。女性主体の部活動は男性主体の部活動と比べ、先輩後輩間のヒエラルキー的な上下関係が顕著に見られたからである(表11)。同様の結果は、小野・庄司(2015)でも確認されている。

第3に、「認め合い・高め合い」(部活動内の雰囲気)についてである。部活動の主たる構成員の性別に関わりなく、“部員がお互いを認め合い、話し合いや協力をすることによって集団全体を高め合おうとする”雰囲気が醸成されている場合に、部活動におけるいじめは抑制される傾向にあった。このような「認め合い・高め合い」という部活動内の雰囲気は、学習指導要領における特別活動の目標とも類似している。特別活動の目標を見ると、育成が目指される資質・能力の1つとして、「集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする」が掲げられている(『中学校学習指導要領 第5章 特別活動』第1目標<sup>14)</sup>)。このことを踏まえると、部活動を通じて、特別活動に期待される資質能力を子どもたちに育むことが、いじめが起きにくい部活動をつくる上で重要であるといえよう。

第4に、「人間関係・主体性重視」(指導態度)についてである。部活動の主たる構成員の性別に関わりなく、主な指導者が“部員との人間関係を重視するとともに、部員の主体性を尊重している”場合に、部活動内に“部員がお互いを認め合い、話し合いや協力をすることによって集団全体を高め合おうとする”雰囲気が醸成され、結果として部活動におけるいじめは抑制される傾向にあった。主たる指導者の指導態度は、部活動におけるいじめに直接的な影響を及ぼしてはなかったものの、部活動内の雰囲気を介して、間接的な影響を及ぼしていたのである。この結果は、「認め合い・高め合い」という部活動内の雰囲気を醸成するにあたり、部員任せにしては不十分であり、主たる指導者が部員とどのように関わっていくのか、ということが極めて重要であることを示唆している<sup>14)</sup>。

最後に、部活動におけるいじめに直接的・間接的な影響を及ぼす要因には、男女で異なる側面も見られた、と

ということにも触れておきたい。まずは、直接的な要因についてである。男性主体の部活動では、主な指導者が部員に対して暴言を吐いたり暴力を振るったりしている場合に、部活動におけるいじめは起こりやすい傾向にあった<sup>(1)</sup>。その一方で、女性主体の部活動では、部活動の規模（人数）が多い場合に、部活動におけるいじめは起こりやすい傾向にあった。

次に、間接的な要因についてである。男女ともに、「厳格・権威的指導」（指導態度）が部活動におけるいじめに間接的な影響を及ぼしていた。しかし、その影響の仕方は男女で異なっていた。男性主体の部活動では、主な指導者が“部員に対して厳しく、かつ権威的に指導している”場合に、部活動内の先輩後輩間でヒエラルキー的な人間関係が形成され、結果として部活動におけるいじめは起こりやすい傾向にあった。その一方で、女性主体の部活動では、主な指導者が“部員に対して厳しく、かつ権威的に指導している”場合に、部活動内に“部員がお互いを認め合い、話し合いや協力をすることによって集団全体を高め合おうとする”雰囲気醸成され、結果として部活動におけるいじめは抑制される傾向にあった。つまりは、「厳格・権威的指導」という指導態度は、男性主体の部活動についてはいじめを引き起こす間接的な要因となることを示唆している一方で、女性主体の部活動についてはいじめを抑制する間接的な要因となることを示唆しているのである。

しかし、なぜ男女で部活動におけるいじめに影響を及ぼす要因に違いが見られるのか、ということまでは、本研究で明らかにすることはできなかった。今後の課題としたい。

## 注

- (1)中澤（2011）は、社会学・心理学領域における運動部活動研究を「参加・適応研究」「機能・効果研究」「顧問教員研究」の3つに分類している。これら3つのうち、部活動の教育的効果に着目した研究は、「参加・適応研究」と「機能・効果研究」の2つに該当する。
- (2)第2回調査の実施時期は、2013年である。コアとなる調査の対象は、前期中等教育段階の教員。参加国・地域数は34カ国である。
- (3)この点について、内田・齊藤編（2018）は、「公立の義務教育諸学校等の教育職員の給与等に関する特別措置法」という法律の観点から批判的に検討している。
- (4)数少ない研究に、長谷川（2013）などがある。
- (5)その最たる理由は、森田・清永（1986）によって「いじめ集団の四層構造論」が提唱されたからである。「いじめ集団の四層構造論」では、いじめを被害者と加害者の二者間の問題として捉えるのではなく、学級集団全体のあり様が問われる問題である、と考える。
- (6)ただし、「被害の継続性ないしは反復性」については、“1回のいじめでも、被害者の心身に深刻な影響を及ぼすケースがある”、“一人の生徒が複数の生徒を1回ずつ

いじめて回った場合、それがいじめとしてカウントされない”といった理由から、必須の構成要素とすることを疑問視している。

- (7)その他の内訳については、「ボート部（2人）」「新体操部（2人）」「ホッケー部（1人）」「ラグビー部（1人）」「なぎなた部（1人）」「文芸部（1人）」「英語部（1人）」「技術部（1人）」となっている。
- (8)「その他」と回答した者についても、自由記述の内容を踏まえ、「運動部系」か「文化部系」のいずれかに分類している。
- (9)項目については、長谷川（2005）を参考にした。
- (10)項目については、長谷川（2005）を参考にした。
- (11)項目については、小野・庄司（2015）を参考にした。
- (12)「部員との関係」に関する項目は、「先輩にえこひいきされた」「先輩に怒られた」「他の部員との仲が悪くなった」の3つである。
- (13)「部の方針・性格」を構成する項目には、これら2項目の他に、「部の『伝統』』と言えるものがある」「部全体でははっきりとした目標を持って日々活動に取り組んでいる」「目標達成のために部全体でよくミーティングを行っている」「部全体で部員は同じ目標を共有している」という項目が含まれている。
- (14)「認め合い・高め合い」（部活動内の雰囲気）を従属変数とした重回帰分析の結果（表18）を見ると、「人間関係・主体性重視」（指導態度）の標準偏回帰係数（ $\beta$ ）の値は男女ともに他の変数と比べて最も高くなっている。
- (15)男性主体の部活動の結果については、男性は女性と比べ、指導者による暴力や暴言を受けやすい傾向にあった（表7）ことを考慮する必要があるかもしれない。

## 引用・主要参考文献

- 藤井誠二 2013、『体罰はなぜなくなるのか』幻冬舎。
- 長谷川祐介 2005、「高校部活動の多様性をもつ影響力の違い—パーソナリティへの影響を中心に—」『日本特別活動学会紀要』第13号、43-52頁。
- 長谷川祐介 2014、「中学部活動における指導者からの暴力被害を規定する要因」『日本生徒指導学会機関誌』第13号、59-69頁。
- 林川友貴 2015、「中学生の学校適応メカニズムの実証的検討—学級と部活動に着目して—」『教育社会学研究』第97集、5-24頁。
- 岸野麻衣・無藤隆 2009、「学級規範の導入と定着に向けた教師の働きかけ—小学校3年生の教室における学級目標の標語の使用過程の分析—」『教育心理学研究』第57巻第4号、407-418頁。
- 国立教育政策研究所編 2014、『教員環境の国際比較—OECD 国際教員指導環境調査（TALIS）2013年調査結果報告書』明石書店。
- 久保田真功 2013、「なぜいじめはエスカレートするのか？—いじめ加害者の利益に着目して—」『教育社会学研究』第92集、107-127頁。
- 三島美砂・宇野宏幸 2004、「学級雰囲気に及ぼす教師の影響力」『教育心理学研究』第52巻第4号、414-425頁。
- 森田洋司・清永賢二 [1986] 1994、『新訂版 いじめ—教室の病』金子書房。
- 森田洋司 1999、「『現代型』問題行動としての『いじめ』とその制御」宝月誠編『講座社会学 逸脱』東京大学出版会、85-120頁。

- 森田洋司・滝充・秦政春・星野周弘・若井彌一編 1999, 『日本のいじめ—予防・対応に生かすデータ集—』金子書房。
- 中澤篤史 2011, 「学校運動部活動研究の動向・課題・展望—スポーツと教育の日本特殊的関係の探求に向けて—」『一橋大学スポーツ研究』30巻, 31-42頁。
- 中澤篤史 2014, 『運動部活動の戦後と現在—なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか—』青弓社。
- 中澤篤史 2017, 『そろそろ、部活のこれからを話しませんか—未来のための部活講義—』大月書店。
- 荻上チキ 2018, 『いじめを生む教室—子どもを守るために知っておきたいデータと知識—』株式会社 PHP 研究所。
- 岡田有司 2009, 「部活動への参加が中学生の学校への心理社会的適応に与える影響—部活動のタイプ・積極性に注目して—」『教育心理学研究』第57巻第4号, 419-431頁。
- 小野雄大・庄司一子 2015, 「部活動における先輩後輩関係の研究」『教育心理学研究』第63巻第4号, 438-452頁。
- 大西彩子・黒川雅幸・吉田俊和 2009, 「児童・生徒の教師認知がいじめの加害傾向に及ぼす影響—学級の集団規範およびいじめに対する罪悪感に着目して—」『教育心理学研究』第57巻第3号, 324-335頁。
- 佐藤静一 1993, 「学級『集団』・生徒『個人』次元の学級担任教師のPM式指導類型が生徒の学校モラルに及ぼす交互作用効果」『実験社会心理学研究』33巻1号, 52-59頁。
- 白松賢 1997, 「高等学校における部活動の効果に関する研究—学校経営戦略の一視角—」『教育経営学会紀要』第39号, 74-88頁。
- スポーツ庁 2018, 『平成29年度 運動部活動等に関する実態調査報告書』東京書籍。
- 高木修 1986, 「いじめを規定する学級集団の特徴」『関西大学社会学部紀要』第18巻第1号, 1-29頁。
- 竹村明子・前原武子・小林稔 2007, 「高校生におけるスポーツ系部活参加の有無と学業の達成目標および適応との関係」『教育心理学研究』第55巻第1号, 1-10頁。
- 滝充 1996, 『「いじめ」を育てる学級特性—学校がつくる子どものストレス—』明治図書。
- 手塚洋介・上地広昭・児玉昌久 2003, 「中学生のストレス反応とストレスラーとしての部活動との関係」『健康心理学研究』16巻第2号, 77-85頁。
- 上野耕平・中込四郎 1998, 「運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究」『体育学研究』43巻1号, 33-42頁。
- 内田良 2017, 『ブラック部活動—子どもと先生の苦しみに向き合う—』東洋館出版社。
- 内田良・斉藤ひでみ編 2018, 『教員のブラック残業—「定額働かせ放題」を強いる給特法とは?!』学陽書房。